

「ありがとう西高！」新聞

発行元：「ありがとう西高！」実行委員会広報室
Mail：nishikouarigatou@gmail.com

Instagram：nishikouarigatou
twitter：@nishiko_arigato
Hashtag：#ありがとう西高

西高「最後の1年」へ

大宮西高校はあと1学年を残すのみとなりました。卒業生有志による当団体「ありがとう西高！」実行委員会による活動も佳境に入っていきます。大宮西高校の「最後の1年」にあたり、発起人よりご挨拶を申し上げます。

「ありがとう西高！」と、悔いなく言える1年に。

実行委員会 発起人 栗原俊明よりご挨拶



我らが大宮西高校、いよいよ最後の1年となりました。

たった数名、有志の思いつきから始まった活動ではありましたが、気がつけばOB・OG、そして関係者の皆さまなど多くのご賛同を得ることができ、またそのご理解の中で文化祭への参加を筆頭に、当初思い描いた「こういうことができれば良いのでは」という思いを実現できました。日々忙しい時間を割いて我々の活動にお付き合いいただいた皆さまに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、この1年を通して改めて感じたことが「気質」です。学校に行くたび、様々な場面で「西高愛」を口にし、何事にも前向きに取り組む現役の後輩達の姿を見せつけられました。その純粋な気持ちに圧倒されるばかりでしたが、聞けば「これが西高生の気質」とのこと。そんな話を聞きつつ彼らを見てみると、何も考えずただ何となく日々を過ごして

いた自分の学生時代を恥ずかしく感じるのと同時に、うらやましさを後悔など複雑な感情を覚えずにはいらませんでした。

しかし一年を通して活動し周囲から様々なご意見をいただくうちに、ふと自分たちのこの活動も「西高愛」から生まれたものということ、そして自分が大義名分を振りかざす大人になってしまっていたことに気づかされました。卒業してこれだけの年月を経てもなお何かを得られることに、母校の尊さ・偉大さを改めて思い知らされるばかりです。

手探りだった1年前とは状況も変わり、閉校式など具体的な名称も聞かれるようになりました。そして来年の3月に向けてこの流れはさらに加速していくことと思います。そんな中でもシンプルに学校を思う気持ちを大切に、そしてこの1年の最後に皆さんと笑顔で「ありがとう西高！」と言えるよう、悔いのないよう活動して行きたいと思っています。



西高公式キャラクター「コッピンとコップリン」

あの場所は、今 -稲荷塚古墳(後編)-

前編では大宮西高のシンボル「稲荷塚(いなりづか)古墳」の歴史を追った。今回は、西高と古墳の関係にスポットを当てたい。

稲荷塚古墳は、1981年(昭和56)から1982年(昭和57)にかけて初めて周溝の発掘調査が行われた。その際に多数の埴輪や勾玉が発掘されたことが報告されており、これらの出土品は現在、さいたま市博物館に所蔵されている。この発掘調査にはアルバイトで一人の西高OBが参加していた。「大宮西高伝」でも話を伺った、あらい太郎さんだ。当時どのような作業に従事したか聞いてみたところ、「重機で掘り起こした土砂を一輪車で別の場所へひたすら運び出す作業。まさに肉体労働そのものでした」と語ってくれた。

2011年(平成23)には、大宮西高の創立50周年記念に合わせ、古墳にちなんだキャラクターが登場した。西高公式キャラクター「コッピンとコップリン(写真)」だ。頭が古墳で制服を着ているという、非常に斬新なデザインだ。当時在校生だった筆者にとって、発表時の衝撃は忘れられないものだった。たしか選択授業で美術を受講していた生徒たちから、デザインを公募して決定されたものだったと思う。

半世紀にわたる古墳と西高の関係を追ってみた。筆者は少し近づきたい印象があったが、多くの西高生は古墳に愛着をもって学校生活を送っていたように思う。我らの古墳が、新校の生徒たちの学生生活も優しく見守ってくれることを願いたい。(石井)

本活動が埼玉新聞で紹介されました

3月3日付、埼玉新聞1面トップに、本活動の紹介記事が掲載された。2月に実施した定例会議の際に、同紙記者から取材を受けた内容



3月3日付埼玉新聞1面、なんと1面を飾ることに!

が元になっている。『母校に感謝 記録、発信』と題し、活動の趣旨やこれまでの経緯についてまとめられている。新聞掲載後はSNS等からの問い合わせも増え、多くの方に活動を知ってもらえた実感している。

また本紙についても『丁寧に取材し記事にしている』と評価いただいた。これを励みに今後も情報を発信し続けていきます。

大宮西高伝

野球部を通して学んだ仲間の大切さ

大越 憲和さん（寿司店店主）

その店の名は「大寿司（ひろずし）」。繁華街に面した店ではないが、埼玉県で一番良いネタが集まることで知られ、県外から足を運ぶ常連も少なくないという。表にかかる屋号の入ったのれんをくぐると、奥から張りのある声に出迎えられた。

活躍する大宮西高卒業生に迫る大宮西高伝。今回は寿司店店主、大越憲和さんに、高校時代を振り返っていただいた。



高校時代を語る大越さん。仕込みと接客の合間を縫って取材に応じてくれた。

高校生活になりますよね」大越さんは頭をかき、目を細める。外野の守備位置を流動的に担い、最後には副キャプテンを務め上げた自身の姿を思い出したように見えた。

スターズ甲子園に挑んでいる。このマスターズ甲子園とは、かつての高校球児が再び甲子園を目指すものだ。大越さんも、仕事の合間を縫って参加する。大越さんから見て「10歳くらい上の先輩たちから、10歳くらい下の後輩たちが今のチームメイトです」。こうした活動も仲間あつてのことと振り返る大越さん。その言葉に、監督の教えをのぞかせた。

先輩に誘われた「大宮西高」

野球部に所属していた中学時代の大越さんには、尊敬する先輩がいた。その先輩は大宮西高に進学。大越さんが進路を考える頃になると「良い学校だから、オマエも来いよ」と誘われた。実は、浦和南高校への進学を考えていた大越さん。しかし当時、浦和南には軟式野球部しかなかったため、迷いがあった。そこに野球部でつながる先輩から声が掛かり、それならばと大宮西高に狙いを定める。

それと、と大越さんは続けた。「姉が私立の学校に通っていたので、自分は学費が安い、市立の方が良いだろうという思いもありました」。中学生の頃から、家族を気遣う一面を持っていたようだ。

大宮西高に入学すると、もちろん中学時代の先輩の後を追ひ、野球部に入部。「やっぱり野球部ですから、どうしても部活が中心の

厳しくも、チームの大切さを教わる

しかしながら、野球部では順風満帆とはいかなかった。「なにしろ、ケガが多かったですよ」大越さんは苦笑する。「骨折もしたし、靭帯を伸ばしたり、ひと通りやりましたね」。練習もキツイが、治療とリハビリで練習できない状況はもっとキツイ。それで何度か、部活を辞めようと思ったこともあったそう。その頃を振り返り、大越さんは「けど、辞めなくて良かったですね」静かに語った。

当時、野球部の監督は体育科の鈴木先生が務めていた。「鈴木監督は、厳しかったですね」大越さんは再び目を細めて続ける。「厳しかったですけど、3年間、チームの大切さを教わりました」。

ところで、大宮西高野球部OBは例年、マ

進路の選択と恩師の言葉

高校も2年生の後半を過ぎれば、部活ばかりとはいかなくなる。周囲が進学を検討する中、大越さんには焦りがあった。——みんなと同じように進学したい。けど、本当に自分が進みたい道だろうか。

そんな状況を察してか、当時担任だった岡田先生が三者面談の席で諭してくれた。「学歴がすべてじゃないと、お父さんの後を継いで寿司屋になれるなら良いじゃないかと言ってくれたんです」。大宮西高では先生にも恵まれたと、大越さんは言葉に感謝を込めた。

(次回へ続く)